

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 朴 承 賢

本論文『1DKでの孤独と死、そして尊厳：「東京桐ヶ丘都営団地」の高齢化と建替えのエスノグラフィー』は、文化人類学的手法により、北区桐ヶ丘団地において主に2008年9月から2010年8月までの長期調査によって得られた団地暮らしのデータと、現在進行中の建替え過程に関してなされたその後の追加調査に基づいて、日本における公営住宅の高齢化と建替え事業のもたらす生活変化の実態を解明したものである。公営団地としての住居環境が人びとの生活をどのように規定するのか、その一方で、このような空間を人びとが日々の生活実践からいかに自分のものにしていくのかなどについて、高齢化と2DKから1DKへの住替えを基軸に、民族誌的な手法と観点から論じているところに、本論文の特徴がある。

論文は3部構成で以下の全9章で成り立っている。序章は問題提起として高齢化と建替えの進む調査地桐ヶ丘団地の概観と、老年人類学や居住空間に関する先行研究を整理し、本研究の枠組みが提示される。第Ⅰ部「団地をめぐる家族・住居規範」は、第1章『「家庭」の成立と『団地族』の誕生』で、近代日本の家族規範がどのように構築され、いかに空間的に具現化したのか、第2章「戦後公営住宅政策の展開と衰退」では、持ち家中心主義的な戦後の住宅政策の中で、家族規範の実現化された公営住宅が、福祉政策と住宅政策の狭間で揺らぐ「国民住宅」としての位相が描かれる。第Ⅱ部「老いてゆく団地」は、第3章「桐ヶ丘団地の暮らし」で、引揚げ者の臨時住宅地「赤羽郷」からの歴史を跡づけながら、地域自治会を中心に地域に根を下したコミュニティの在り方が照射される。第4章「介護保険時代の老いの経験」では、桐ヶ丘デイホームでの参与観察調査を通し、「自立」がスローガン化していく介護保険政策が地域でどう展開してきたのかが考察される。1990年に「高齢者の通所施設」として設立された桐ヶ丘デイホームは、介護保険制度の実施で2001年に「自立支援施設」へ、さらに同制度の改定で2006年には「介護予防施設」へと位置づけが変更される中で、「施設」を忌避し「依存」を恥じる高齢者たちに、いかに「自立」が内面化され、経験されているのかが析出される。第Ⅲ部「1DK‘マイホーム’での孤独と死」は、第5章「建替えと高齢化がともに進む団地」で、1996年から始まる老朽化による建替え事業により7割あった2DK中心の設計から1DKが4割を占めるに至った居住構成の変化が詳述され、それが間取りだけの問題でなく、家族解体による住居規範の大転換であることが読み解かれる。第6章「居住の貧困」では社会的孤立の日常化が問題とされ、第7章「孤独死」では日常化した孤立が顕在化する死として、団地住民の最も嫌悪する孤独死の意味が追究される。終章では自己責任視された孤独死を、彼らが尋常でないほど畏怖するのは、自分を統制し切れなかった生が暴露され、「尊厳」が脅かされるからだという理解

を導く一方、社会的疎外に抵抗する空間的想像力の可能性を探ることで、議論をまとめる。

このような内容をもつ本論文の学術的貢献は、以下の3点にまとめられる。第1に、高齢化や超高齢社会の諸問題がより切実な社会的課題となっていく中で、他人に依存せず自律的に生活することが可能な状態、すなわち「自立」が内在化している高齢者の、「尊厳」の内実を描き出した点である。加えてこうした「自立」には、他者依存を控えつつも実は他人の存在が不可欠であることを論証し、私的領域の境界を越える他者とのつながりこそ、その基盤となることが主張される。

第2に、本論文が文化人類学的な手法により長期のフィールドワークに基づいて執筆された点である。住宅研究・集合住宅研究は概して統計的手法に基づく量的研究が主流を占めるが、本研究はデイホームでの参与観察をはじめ、数多くの居住者や行政諸機関等の関係者からの、丹念で繊細な聞き書き調査が蓄積された質的研究である点に大きな特徴がある。とくに住民の生活者としての視点において公営住宅がどのように捉えられているか、また住民の生活世界や日常実践を通じて地域社会がどのように再編成されていくかを観察、記述、解釈している。その地道な作業は、高齢者の「自立」を単なるスローガンに終わらせないためにも、極めて重要な基礎的研究だと評価される。

第3に、本論文の独自性は、団地住民の「団地歴」を描きながらも、図らずも集合住宅の生老病死という「一生」を描き出している点である。団地が計画・造成されるまでを扱った研究は建築計画の分野では多々あるものの、引き揚げ臨時住宅地としての団地前史から、建替えという建築としての世代交替までもが詳述された長いタイムスパンの研究は、新たないくつもの見方を提供する。例えば、公営住宅としての所得制限が世帯分離を促進する要因として働き、ますます一人暮らしを増加させるといった家族団欒から家族解体・シングルの時代へと向かう動態のプロセスなどは、説得力をもった論述となっている。

本論文は、複雑な要因が絡み合って現象化している現代日本における「孤独」や高齢者の「自立」の問題を、制度・政策から生活世界まで、さまざまな切り口から立体的に解明している点で、老年人類学をはじめ高齢者福祉や居住に関する研究等に大きく貢献している。さらに、地域に根を下ろした人たちが共有する歴史、すなわち入居当時の喜びといった喜怒哀楽の「団地歴」の共有化が、空間的秩序を自分たちのものにする「生」の可能性を拓く契機となるとする議論は、論証が十分ではないものの、重要な観点である。

審査委員会においては、本論文の論述のなかには説明不足や論理的に飛躍する箇所が少なからず見られること、さらに各章に小括を設けたり、公共・共用空間の変遷を地図化して示しエビデンスをより確実なものにするなど、論証や分析の仕方には改善すべき余地があることが指摘された。しかしこれらは、本論文全体の価値を損なうほどの重大な瑕疵ではないことが審査員全員によって確認された。したがって、本委員会は本論文提出者に博士（学術）を授与するにふさわしいものと認める。